

令和4(2022)年度 文部科学省委託事業

日独学生青年リーダー交流 事業報告書

目次

事業概要	1
------	---

<事業報告>

1. 参加者名簿	4
2. 日程	6
3. ダイジェスト	8
4. 参加者アンケート	12
5. 個人レポート	14

<全体の総括>

全体の総括	24
-------	----

事業概要

1. 事業趣旨

ボランティア活動を行っている日本とドイツの学生の交流を推進することで、高い国際感覚を備えた青少年を育成する。

2. 実施関係機関

(1) 主催

日本：文部科学省

ドイツ：家庭・高齢者・女性・青少年省

(2) 実施

日本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

ドイツ：ベルリン日独センター

3. テーマ

若者の社会参画

4. 参加人数

日本：18名

ドイツ：9名（ディスカッションのみ過年度参加者等が3名追加で参加）

5. 日程（時間はすべて日本時間）

- | | |
|----------------------|-------------------|
| (1) 事前研修 | 9月9日（金）午後2時～午後4時 |
| テストコール（Zoom機能の接続テスト） | 午後4時～午後5時 |
| (2) オリエンテーション・顔合わせ | 9月10日（土）午後4時～午後7時 |
| (3) 講義 | 9月12日（月）午後4時～午後7時 |
| (4) バーチャル訪問① | 9月13日（火）午後4時～午後7時 |
| (5) バーチャル訪問② | 9月14日（水）午後4時～午後7時 |
| (6) バーチャル訪問③ | 9月15日（木）午後4時～午後7時 |
| (7) ディスカッション① | 9月16日（金）午後4時～午後7時 |
| (8) ディスカッション② | 9月17日（土）午後4時～午後7時 |

※（1）は日本団のみ参加。

※（2）～（6）は日独合同開催とし、各回終了後、30分間の参加者間交流あり。

※ 新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、全日程を通してWEB会議システムを使用したオンライン形式で実施。

事業報告

1. 参加者名簿

※ 参加者氏名、所属等は省略。

(1) 日本団

(2) ドイツ団

2. 日程

○日本団プログラム

月 日	プログラム
9月9日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> ○事前研修 <ul style="list-style-type: none"> ・講義 「ドイツ語講座、ドイツを知る」 獨協大学外国語学部 准教授 マティアス・ビティヒ 氏 ・全体会（アイスブレイク） ○接続テスト

○日独合同プログラム

月 日	プログラム
9月10日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> ・開会 ・全体会（アイスブレイク） ・グループ活動①：自己紹介 ・グループ活動②：自分の所属している団体での活動紹介 ・グループ活動③：自身が思う若者の社会参画について
9月12日 (月)	<ul style="list-style-type: none"> ・講義①（ドイツ側） 「子どもと若者の参画」 ザクセン州青少年連合 青少年参画窓口担当職員 オリヴァー・リュッキング 氏、スヴェタ・モーザー 氏 ・講義②（日本側） 「若者の社会参画」 国立青少年教育振興機構 青少年教育研究センター研究員 大山 宏 氏 <p style="text-align: center;">各講義の後、質疑応答</p>
9月13日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・バーチャル訪問①②（ドイツ側）： 民主主義と勇気のためのネットワーク (NDC) 講師：NDC ボランティア 2名 子どもと家族の居場所マライケ 講師：所長 カタリーナ・ヴェンツェル 氏 <p style="text-align: center;">取組／事業紹介、質疑応答、意見交換</p>

月 日	プログラム
9月14日 (水)	<ul style="list-style-type: none"> ・バーチャル訪問③④（日本側）： <ul style="list-style-type: none"> 一般社団法人 淡路エリアマネジメント 講師：栗田 壮一郎 氏 （学生ボランティア）鈴木 愛子 氏、永井 里歩 氏 認定 NPO 法人 キッズドア <ul style="list-style-type: none"> 講師：キッズドア 東北エリア 菊地 和敏 氏 （学生ボランティア）田口 碩 氏、今野 匠 氏、奥瀬 皓太 氏 <p>取組説明、質疑応答、学生ボランティアを交えた意見交換</p>
9月15日 (木)	<ul style="list-style-type: none"> ・バーチャル訪問⑤⑥（ドイツ側）： <ul style="list-style-type: none"> ブント・ユーゲント（ドイツ環境自然保護連盟青年部） 講師：ブントユーゲント連邦理事 マリー＝ルイーザ・ヴァーン 氏 ブランデンブルク州若者代表 <p>[U25] ベルリン (ベルリン大司教管区カリタス連盟 25歳未満オンライン自殺予防相談)</p> <p>講師：ピア・ボランティア</p> <p>取組／事業紹介、質疑応答、意見交換</p>
9月16日 (金)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループディスカッション① <p>テーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 本事業で学んだこと 2) 自身の考えにどのような変化があったか 3) その他（疑問点、確認したいことなど）
9月17日 (土)	<ul style="list-style-type: none"> ・グループディスカッション② <p>テーマ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 明日から取り組んでみたいこと 2) 現在取り組んでる活動などの経験を、将来社会に対してどのように活かし、貢献できるか 3) 今回、学んだことで社会に貢献できることはあるか <ul style="list-style-type: none"> ・成果共有、講評 ・閉会

※このほかドイツ団は2日間の事前研修及び1日間の事後研修をドイツ側担当機関が実施

3. ダイジェスト

【日本団プログラム】

<9月9日（金）>

○日本団事前研修

獨協大学外国語学部 准教授マティアス・ビティヒ氏から「ドイツを知る」をテーマにした講義や、簡単なドイツ語講座を行い、プログラムに備えて基礎的な知識を学んだ。後半は簡単な自己紹介を行った後、翌日から始まるドイツ団との交流に向けて、日本団内で関心事項や普段のボランティア活動について互いに理解を深める自由交流の時間を取った。これにより、参加者の緊張が解け、距離が縮まった。



【日独合同プログラム】

<9月10日（土）>

○オリエンテーション・顔合わせ

開会式、全体でのアイスブレイクの後、日独合同の3グループに分かれて、グループ活動を行った。自己紹介に続いて各自が所属団体での活動を紹介し、自身が思う若者の参画について意見を述べあった。小グループでの情報・意見交換を通して、お互いをより深く知り合うとともに、「若者の社会参画」について自身の考えを整理した上で、9月16日（金）、9月17日（土）に同じグループで行う合同ディスカッションの基盤を作る時間となった。

<9月12日（月）>

○講義

前半は、ドイツ ザクセン州青少年連合 青少年参画窓口担当職員のオリヴァー・リュッキング氏、スヴェタ・モーザー氏から「子どもと若者の参画」について講義を受けた。途中、「どのように社会に参画して自分たちの意見を反映させることができるか？」など、講師の側から数回にわたって参加者への問題提起があり、参加者との意見交換をはさむ形で進められた。双方向形式の講義で、各自が社会参画についてより具体的に考えながら、耳を傾けることができた。



社会参加の実践例
Praxis der gesellschaftlichen Partizipation



子ども・若者の生活の中に、地域社会と出会う場を設ける取り組みも各地で展開している。



上: 福島県白河市にある「復興支援」の飲食店「EMANON」。本1階は地域の「福祉活動」の場となる。TOMATO
 中: EMANON - Cafe in traditionellem Holzhaus, das sich besonders an Oberschüler*innen richtet.
 下: Gemeinschaftshaus „Oskar's house TOMATO“ im Bezirk Setagaya)

Zahlreiche Projekte japanweit versuchen Räume der Begegnung zu schaffen, wo Kinder und Jugendliche in Kontakt zur lokalen Community treten können.

後半は、青少年教育研究センター研究員の大山宏氏より日本における「若者の社会参画」について、歴史的背景から現在の状況まで、俯瞰的な視点での講義を聴き、知見を深めることができました。講義後の質疑応答では、ドイツの参加者からは日本の現在の雇用制度や社会参画の形態について質問が寄せられ、日本の参加者は、社会参画のために必要な教育や自身のボランティア活動での大人との協働についての質問で、講師の先生からヒントやアドバイスを得ていた。

<9月13日(火)>

○バーチャル訪問①(ドイツ側)

前半は、「民主主義と勇気ネットワーク (NDC) ライプツィヒ支部」ボランティアのアルムートさん、ローヴィスさんから、民主主義、社会参画、差別等に関する同団体の取組について、クイズ形式のやり取りを交えながら説明を受けた。担当者との意見交換では、活動者のバックグラウンドやメンバー間の交流などに関して貴重な意見を伺うことができた。

2. WAS MACHT DAS NDC?

- bundesweites Netzwerk, 1999 in Sachsen entstanden
- Engagement für Demokratieförderung und gegen menschenverachtendes Denken
- Ausbildung von jungen Menschen als Multiplikatoren
- Durchführung von Projekttagen, Seminaren und Fortbildungen an Schulen, Berufsschulen und Bildungseinrichtungen

② NDCの活動概要

- 全国的なネットワーク、1999年にザクセン州で設立
- 民主主義の促進へのコミットメントと人間蔑視の思考に對立
- 若者が研修を受けることで普及効果
- 学校、職業訓練校、教育施設でプロジェクトデー、講演会、研修を実施

WAS DENKT IHR?

Wie viele Projekte hat das NDC im Bundesland Sachsen?

1. 100
2. 200
3. 300
4. 400
5. 500

どう思う?

NDCはザクセン州内でいくつのプロジェクトを実施していると思いますか。

正解は 300 です

1. 100: 正解は300です。100は少なすぎます。
2. 200: 正解は300です。200は少なすぎます。
3. 300: 正解です。素晴らしいです。
4. 400: 正解は300です。400は多すぎます。
5. 500: 正解は300です。500は多すぎます。

後半は、ドレスデン市内でも失業率が高く、多くの社会問題を抱え、子どもに関心がない親が多い地区で、地元の人々に居場所を提供し、子どもが信頼できる大人がいることを伝えながら、社会性を身につける支援をする団体「マライケー子どもと家族の居場所」の取組について学んだ。担当者から、若者の貧困の連鎖を断ち切るための支援や、居場所提供の取組について、動画を用いた説明を受けた。ドイツの若者を取り巻く様々な社会問題について現場の声を聴くことができ、日本からは具体的な支援の内容や、コロナ禍におけるボランティア活動のあり方など、幅広い質問が聞かれた。

<9月14日(水)>

○バーチャル訪問②(日本側)

「一般社団法人淡路エリアマネジメント」は、千代田区淡路町に暮らす住民や学生など様々な人との交流の機会を作り、コミュニティを育む活動を行っている。実際に活動している学生から、活動内容や取り組みについての説明があり、その後の質疑応答では、日本団・ドイツ団から多数の質問があり、質問に答えながら意見交換を交わしている様子が見受けられた。

後半は、「認定NPO法人キッズドア」担当者から、貧困家庭及び被災地での学習支援の取り組みについて説明があり、現場で実際に支援を行っている学生ボランティアから「活動を始めたきっかけ」や「活動時の悩み」などの話から、たくさんの意見交換が交わされていた。

① 福祉交流
みんなのサロンのお手伝い



千代田区に住む、子育て中の親子、障がいのある方、高齢者の方々が訪れるサロンで簡単なボードゲーム等で交流する。

① Austausch im Sozialen Bereich
Mithilfe beim „Salon für Alle“



Ein Treff, den Eltern mit Kindern, Menschen mit Behinderung und Senior*Innen besuchen können, um bei Gesellschaftsspielen und anderen Aktivitäten miteinander und mit den Studierenden ins Gespräch zu kommen.

日本の子どもの貧困について 

学力向上によって「貧困の連鎖」による自己肯定感の向上		
◆高校・大学・専門学校に進学	◆高校の中退を予防	◆小学生、中学生の学習習慣の定着
ソーシャルスキルの獲得 自立に向けてのトレーニング		
◆多岐のボランティアやスタッフ、同じ環境の子どもたちと定期的に接することで社会性を獲得	◆学生、社会人のキャリアプランを知り、働く意義や様々な人生観に接することで社会性を獲得、積極的に生き残る意欲を獲得	
社会への失望を払拭。将来を信じる力、希望を与える！		
■ つらい人を助けてくれる (国や自治体、社会に対する信頼感)		■ 自分も大きくなったら、困った人を助ける側になりたい

<9月15日(木)>

○バーチャル訪問③(ドイツ側)

前半は「ドイツ環境省自然保護連盟青年部」担当者から、団体の環境問題への取り組みについて説明を受けた。説明は、本団体が力を入れて取り組んでいる脱石炭施策を中心になされた。特に、環境にやさしい製品は高いため、「エコを推進すると低所得者層にしわ寄せが集中する」という問題提起は興味深いものだった。また、日本人の若者が比較的不得手とする政治的活動を行っているという点も日本人参加者にとってはインパクトのある内容であった。

Themen der BUNDjugend

- Klima & Energie
- Kohleausstieg
- Klimagerechtigkeit & Diversität
- Postwachstum / Sozial-ökologische Transformation
- Landwirtschaft
- Digitalisierung
- Mobilität
- Konsum
- Biodiversität
- fairer Handel

BUNDユーゲントが取り組むイシュー

- ・気候変動&エネルギー
- ・脱石炭
- ・気候正義(クライメート・ジャスティス)&ダイバーシティ
- ・ポスト成長/社会的に公平で環境にやさしいトランスフォーメーション
- ・農業
- ・デジタル化
- ・モビリティ
- ・消費
- ・生物多様性
- ・フェアトレード



So funktioniert die Mailberatung von [U25]

- Die Beratung wird durch speziell ausgebildete ehrenamtliche Gleichaltrige („Peers“) durchgeführt.
- Ratsuchende melden sich anonym mit Nickname an
- Erstantwort nach 2 Werktagen – dann nach 7 Tagen
- kostenlos, vertraulich & geschützt
- unbefristet

[U25]のオンライン・メール相談

- 専門の研修を受けた同年代(ピア)のボランティアが相談を受ける
- 相談者はニックネームを使って匿名で登録
- 受信2日(平日)後に1度目の返信
次回は7日後
- 無料、守秘・個人情報の保護
- 期間の定めなし



後半は、「【U25】ベルリン(ベルリン大司教管区カリタス連盟 25歳未満オンライン自殺予防相談)」担当者から、若者の自殺予防に関する取り組みの説明を受けた。また、実際に現場でカウンセラーとして活躍するボランティアスタッフとの意見交換を実施した。団体の活動内容だけに留まらず、ボランティア観や時間の使い方、学業と活動の両立等についても意見が交わされた。

<9月16日(金)、17日(土)>

○ディスカッション

3グループに分かれて2日間にわたってディスカッションを実施した。事業が始まる前のグループ活動で話した「若者の社会参画」のイメージから、講義やバーチャル訪問を通じての考えの変化や現在自身の活動や今回学んだことを社会にどのように活かせるかなどについて、活発な議論が行われた。

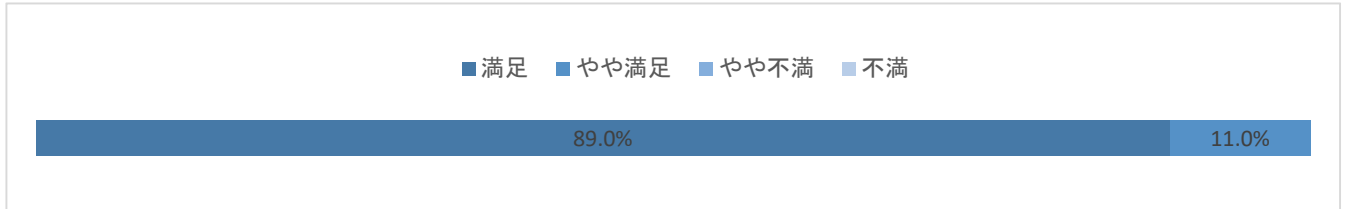
参加者からは、「私たちはどのような社会を望んでいるか?何度も考え直して、オープンマインドな姿勢を保つことは非常に重要」「自らのボランティア活動における不安や悩みが少しずつ取り除かれていったこともあり、今回の交流は特に貴重だった」などの意見が聞かれた。



4. 参加者アンケート

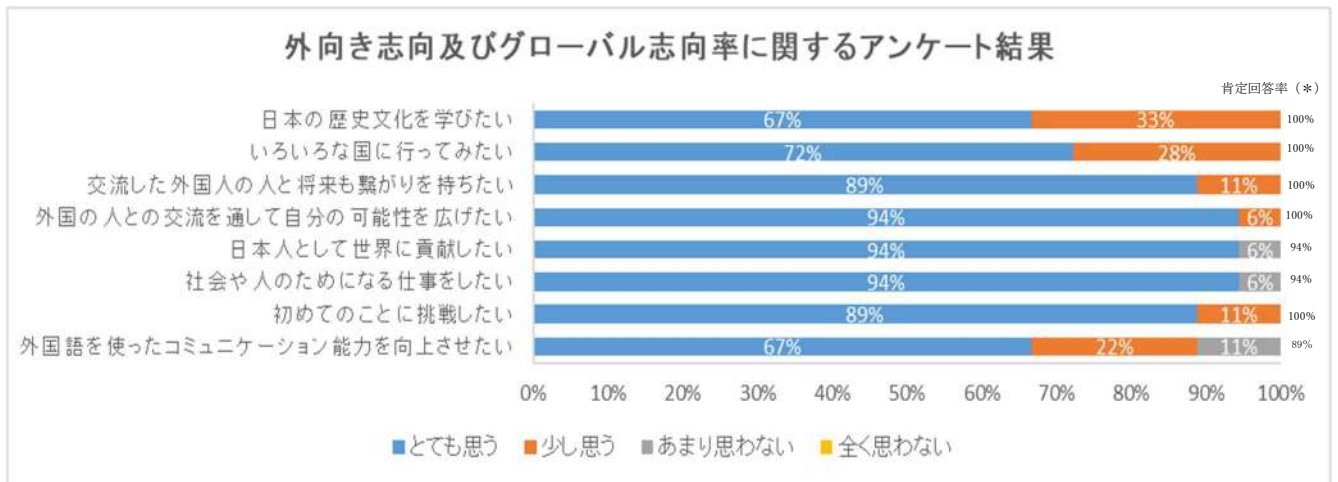
(1) アンケート集計結果

①事業全体の満足度



「事業全体の満足度」に対する回答は「満足」及び「やや満足」を併せた肯定的な回答の率が100%と、参加者にとって有意義な研修になったことが伺える。

②外向き志向率、グローバル人材率



*肯定回答率：各項目の回答に占める「とても思う」及び「少し思う」の合計

【外向き志向の分析】

外向き志向とは、日本人参加者に対し、文部科学省が定めた調査項目3項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか?」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか?」「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか?」のアンケート結果を集計したものである。また、そのうち肯定的な回答の集計から算出した本事業参加者の外向き志向率は99.3%となっており、高い数値を示した。

【グローバル人材志向率の分析】

国立青少年教育振興機構では、上記の外向き志向調査に加え、独自に語学力・コミュニケーション能力及び異文化に対する理解と日本人のアイデンティティー等を加えた8項目のアンケートを作成し、「グローバル人材志向率」として、平均80%以上の肯定的回答を得ることを目標に事業を実施している。本事業においては、日本人参加者の事業後のグローバル人材を志向する率が99%と高く、目標を達成できたと考える。

(2) 参加者の声

①オンライン交流について

- ・トラブルや通信障害が起きた時も丁寧に対応していただきとても助かった。
- ・コロナ禍でどこにも行けない状況の中で、県外・国境を越えたボランティアの方という共通点をもった同世代の方々と知り合えたことが、この事業の中での宝物のひとつとなった。
- ・今回の事業がきっかけでやはり時間のあるうちに海外に行きたいと感じ、学びや挑戦への意欲を刺激してもらったと思う。

②プログラムについて

- ・実際に取り組みを行っている人や働いている人にお話を聞くことによって、理解を深めることができた。
- ・様々な観点から社会参画を考えることができた。
- ・ドイツ側と日本側の両方のことを分かり、ディスカッションでは意見交換で様々な意見を聞いたり、自分の考えを共有したりすることができて、とても良い学びになった。
- ・普段なかなか体験できないような異文化交流の機会をいただけた上に、様々なボランティア団体の活動や現状に対する思い、どういった取り組みをしてきたかという将来像を聞いて、自分の活動に対するモチベーションが上がった。
- ・再確認した事や新しく気づいたことなどとてもいい講義、経験になった。
- ・ドイツ団からは国際的な視点、ドイツでのことを聞くことで、日本との違いを感じ、新たな考えをもたらすことができた。それだけでなく、日本団の意見からもたくさんの刺激を頂き、改めて、意見を伝え合う場はすごく重要なものだ気づくことができる事業だった。
- ・非常に充実した出会いや学びがあった一方で、やはり対面で訪れ、交流したい気持ちがあった。
- ・改めて社会参画とは何かということを考え、多くの人や環境に寄り添う取り組みが進んでいることを知ることができた。

③今後の取組について

- ・みなさんの積極的な態度や発言に刺激を受け、この1週間で価値観や考え方に変化があり、世界中の人と繋がりたいと思った。
- ・(自身が普段活動している) この活動以外にも積極的に社会参画をしていきたいと思う。
- ・今回体験した中で、「自分の活動に取り入れてみたい」と感じるような内容が多くあり、今後それらをどのように活かしていくかということを考えるよい機会となった。

5. 個人レポート

※ 氏名、所属等は省略。

(1)

■このプログラムを通して学習したこと

ドイツと日本の「若者の社会参画」の捉え方の相違が特に印象に残っている。「私の参加で社会現象が少し変えられるかもしれない」という質問に「そう思う」と答えた割合は他国と比べ、日本が突出して低い。一方、ドイツ側の講演では、「参画の場と機会」として市町村や青少年団体、ボランティア制度等に加え、保育所、家庭も列挙していた。そして、「社会参画の経験」として、日本の学生が「生徒会に入り学校の校則を変えた」など、ある種の実績になるような大きな経験を挙げていた一方、ドイツの学生は「家族旅行の行き先を家族と決めた」など、家庭内の小さな参画も社会参画の経験として挙げていた。これはドイツにおける「社会参画」という語の定義や一般的な捉えられ方にも影響を受けることだとは思いますが、この、家庭内の小さな参画も「社会参画」と捉え、州や市町村等へのより大きな参画に繋げる考え方は、政治的有効感覚の醸成にも効果的だと思う。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたい

私は若者の参画を、団体・個人ともにエンパワメントをする団体に所属している。今回日本とドイツの様々な団体から講義をもらい、参加者の所属団体の活動も知ることができた。今回知り合うことができた団体と、今後も関係を続けたい。具体的には、各団体へのインタビューを行い、団体公式 SNS で活動を紹介したり、前回ドイツで行われ、今回日本の広島で行われる G7、C7、Y7 の活動の参考にしたりしたいと考えている。

また、主権者教育を大学の卒業論文のテーマにしていることもあり、今回学んだ日独の相違点が一体なぜ生まれているのか、ということも研究し卒業論文に生かしていきたい。勿論国民性の違いもあるだろうが、法律や政策による違いを検討することが社会をよくする上で重要だと考えるため、違いの要因について研究していく。そして、それを今後の日本の社会をより良く変えていくためにも所属団体の活動でも活かしていきたい。

(2)

■このプログラムを通して学習したこと

このプログラムを通して日本の方だけではなく外国の方にとっても社会参画は欠かせない存在であり、世界は繋がっていて社会参画に対する思いは同じだと感じた。

ボランティア活動をすることで協力することの大切さを知るきっかけになることや共通の目標があることから共生社会とコミュニティ意識に良い影響を与え合っていることを学んだ。また、多くの人と関わることで情報を共有し合うことや人の意見を聞くことなども刺激的だった。更に、違う環境で違う視点から考えることが自分を高めることに繋がると感じた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたい

このプログラムで相手の立場に立って考えることの大切さを学んだのでボランティア活動を続けて、様々な人の立場や考えを尊重しながら活動していきたい。また、それらのことを周りの人に伝えていきたい。

プログラムに参加されている方のお話や行っている活動を聞いて良い所を発見することが出来たので、その良い所を吸収しながら新たなことに挑戦していきたい。

ヤングケアラーのことについて未だに解決されていないので、今後ヤングケアラーのことについて勉強して人を助けられるように日々頑張っていきたい。

(3)

■このプログラムを通して学習したこと

私はこのボランティアに参加するまで参画というのは選挙に行ったり社会問題の解決に向けて行動するようなことだと考えていました。しかし社会参画というのは私が考えているほど難しいことではなく、身近な学校や家庭でも参画になるのだということを知りました。決定に影響を及ぼすこと、その当事者であることであればだれでも簡単に参画できるのだということを知って、家庭や学校生活で積極的にチャレンジしてスキルアップしていこうと思いました。また日本とドイツで抱える様々な社会問題について話し合い、共通点を見つけて解決策を考えました。例えば若者の自殺率が高いことやボランティアをする人が少ないことです。講義を受けて現状を知り、話し合うことで解決に向けて様々なアイデアを考えました。このように関心をもって実際に行動に移して活動することこそが参画の第一歩になるのではないかと思います。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

このボランティアを通して学んだことを周りの人々に広めていこうと思います。参画という言葉を知ると難しく感じたり、自分は関係ないと考えてしまう人がたくさんいると思います。現に私もこのボランティアに参加する前は参画が簡単にできることだと知らなくて、気が引けてしまっていたからです。学校や家庭での決定も参画であって、徐々に経験を積んでいくことでいつか大きなものを動かす力の構成員になれるということを知れば、よりたくさんの方が社会に対して興味を持ち、自信をもって自分の意見を伝えられるようになると思います。また、日本とドイツが抱える問題について話し合うことで様々な視点や解決策を見つけ、発表することができました。国と国との垣根を越えて交流し、意見を交換したことは私の自信にもなりました。これらの経験を生かして世界をつなぐグローバルな人材になれるように努力したいと思います。

(4)

■このプログラムを通して学習したこと

若者の社会参画という大きな話題についてふんわりとしたイメージで参加しましたが、自分たちが生きる日々の生活や地域などで身近に起こる課題を自分たちができる範囲で、「ちょっとだけ社会を前向きにする」ことが社会参画になるのではないのかと感じました。また、今回のコンセプトであったボランティアは、若者が社会参画する上で、重要な窓口になっているとも感じました。自分一人で環境を変えたり、誰かのために動いたりすることはハードルが高いですが、同じ志を持った仲間がいることで一歩踏み出せたり、さらに積極的に活動することができるようになるのだと思いました。

さらに、様々なボランティア団体の方のお話を聞く中で、ボランティアと言う存在の立ち位置と重要性について学ぶことができました。ボランティアとは、課題の大きさや利益となるかという側面から行政や企業が手を施すことが難しい問題を解決することのできる存在なのだと感じました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

ボランティアが単なる労働力として利用されている側面もあるのではないのかという意見から、参加する私たちが何を目的に活動するのか、そこからどういった価値を創造したいのかをしっかりと考えるべきだと感じました。そのため、私たちの団体でも全体の活動の目的を明確に設定するとともに、所属しているメンバーとの意識共有をしっかりと行っていきたいです。その目的意識を持ったうえで、プロジェクトを始動させたりイベントに参加したりするのはもちろんのこと、事前にプロジェクトごとに自分たちがどういった道筋で何をすることができて、その活動が結果的にどんな効果を成すのかを考え、共有できるようなミーティングの機会を作りたいと思いました。また、活動にきちんと意義を見出すことによって、参加するボランティアもより意欲的に活動できるのではないかと考えています。

(5)

■このプログラムを通して学習したこと

私がこのプログラムを通して学んだのは、社会参画というと敷居が高いイメージがあるが、実はもっと身近なものであるということです。言い換えれば、様々な社会参画の方法があり、自分の関与するコミュニティから参画して行くことで、どんどん大きなムーブメントを起こすことが可能になるのではないかと考えました。私自身は地方の団体に属しているので、ディスカッションの際に「地方でも都市部でも参画が重要だ」という意見がドイツの学生の方からでたことが印象に残っています。これからも自分の力で変えられるところからどんどん参画して行きたいと考えました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

私がこのプログラムを通して活かしたいこと、今後役に立ちたいことは、ボランティアに対する対価というものをも明確にしておくことです。ボランティアと聞くと、日本ではまだまだ無償で行う奉仕活動というイメージが強いと考えます。無償で行うことは悪いことではないと思いますが、ただの労働力として見られてしまうのではないかと懸念点も考えられます。この懸念点を払拭するために、ドイツの団体で行われているユースカードなどの制度について深く学ぶ機会を設け導入にも動いて行きたいと考えています。

(6)

■このプログラムを通して学習したこと

このプログラムを通して、社会参画の定義を広げることができた。例えば、家族と一緒に部屋の模様替えをするとか、生徒会に入って校則について考えるとか、そういった身近な参画も社会参画の一つであるということを知った。

ボランティアに参加することへの壁についても話し合った。ドイツのボランティア活動では、交通費やランチ代などが支給される場合もあり、これがボランティアに参加するという敷居を下げることにつながるという発言があった。一方日本では、学校生活や社会人生活で忙しい世代はボランティアをしないので、敷居が高いというよりも時間がないのだろうという意見も出た。両国の生活スタイルの違いを感じると同時に自分の生活に影響しない範囲でボランティアに参加するという方向性は同じだと思った。

自分の所属団体は基本的に学校内での活動が多く、地域とのかかわりはほとんどない。マライケさんだったり KIDS DOOR さんであったり、その地域に密着した活動というのは地元の人にとってもメリットのあることだと改めて感じた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

このプログラムで感じたのは、ボランティアと地域とのかかわりの親密さとその重要さだったので、それらを活かして企画や活動を組み立てようと思った。例えば、学校の近くのお城に観光に行くことや和紙作りなどをやってみようと思った。以前学校の先生と話し合いをしたときには、学校の近くの農家さんに協力してもらって農地をお借りする、あるいは学校内の空き地を農地にして野菜を育ててみるという意見があった。

高専生らしく、種まきの機械や農薬などを作って実験してみる際にも使えるしいいなあと感じていたので、来年はこのような地域の人たちとのかかわりを意識した活動も提案しようと思った。

また、個人的に政治への興味もあるので、友人と一緒に選挙前にどの人が良さそうか話し合ってみるのも面白そうだと思っている。政党の話などを聞く機会がテレビ以外でないので、演説や政治関係の団体に参加して話を聞きに行ったりしてみようとも思っている。

(7)

■このプログラムを通して学習したこと

まず、日独の両国で多様なジャンルでのボランティア活動が行われていることを知った。私は今まで、ボランティア活動はイベントの運営のために行うものだと思っていたが、政治参加を積極的に行っている団体があることを知り、そのような団体に参加したいと思った。

そして、今回バーチャル訪問をさせて頂いた全ての団体に共通することとして、どんなことを専門として、どのように社会に貢献していきたいかという行動理念が根底にあると感じた。給料が発生しにくいボランティア活動をする上で、お金よりも大事なやりがいを見つけ、積極的に行動に起こして行くことの重要性を感じることができた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいか

私は、このプログラムを自分の描く将来のために活かしていきたい。具体的には、政治参加を積極的に行っている団体に参加したいと思っている。実は、私は将来政策づくりに関われる仕事に就職したいと思っている。そのための足がかりとして、今社会では何を求められているのか、何が課題なのか、早い段階から思考できる機会は非常に魅力的に感じられたからだ。私はボランティア活動を自分の将来に直接活かせるように行動することを目標にしたいと思う。

(8)

■このプログラムを通して学習したこと

ドイツでは社会参画がボランティアという形でとても広く行われ、たくさんの人々が参加していることが分かりました。そして日本では社会参画ということについて改めて意識が低いことを実感しました。しかし、今回この事業に参加した日本の方々はいろいろなことをしっかりと考えていたので、こういう人もいるということも知り自分も頑張らなければならないと強く感じました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいか

まずは私の学校内で自主ゼミの活動を普及させていち早く社会にそのモデルを提供し、様々な人がよりフラットに学習できるようにしたいと思っています。その際、今回聞かせていただいた話やセッションの時に話したことなどを活かしながら活動していきたいと思います。

(9)

■このプログラムを通して学習したこと

私は、今まで社会参画とはボランティアなどをする事で、その上とても難しくハードルが高いものだと思っていました。しかし、家の模様替えや生徒会活動なども社会参画で、今まで普段の生活でやっていたことが、実は社会参画だったということを知り、そんな難しく考えてなくてよいのだと、今までよりも身近なことに感じることができました。

また、日本では少子高齢化で、若者よりも高齢者の人数が多く、割合が高い高齢者の意見が取り入れられて、選挙に行っても若者の意見が取り入れられず、取り入れられたとしても、時間がかかったり、一部のことだけしか取り入れられなかったりするため、諦めてしまうという意見がありました。私は、16歳でまだ選挙権がないということもあり、社会参画と選挙を結びつけて考えることがありませんでしたが、今回の話し合いを通して、社会参画について幅広く考える良い機会となりました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたい

ドイツの学生は、社会参画などについてただ考えるだけでなく、自主的に行動にも移すことができている、私も自ら考え、行動できるようになりたいと思いました。

また、1年前くらいに、先輩たちの代からフードバンクをやりたいという案がでていて、途中まで話が進んでいたのですが、提供する側の企業からの許可がなかなか下りなかったり、企業と企業の連携の仲立ちをするのは難しいのではないかと指摘を顧問の先生からいただき、それ以来ずっと諦めてしまっていました。しかし、今回、ドイツの学生とグループで話し合いをした際に、まずは何事も行動に移してみないとわからないという意見があり、私もまずは声に出して始めてみようと思いました。顧問の先生や上の方から賛成していただけるように、実際にフードバンクをやっている団体から意見を聞き、企画書を作ってみるのも重要なことだと思いました。

(10)

■このプログラムを通して学習したこと

日本とドイツで「ボランティア」に対する捉え方の違いがあることが分かりました。日本ではボランティアをしてどうだったかが重要視されていますが、ドイツではボランティアをすること自体に視点が置かれています。そのような違いがあるからか、ドイツではボランティアをすると参加賞や証明書の発行や、交通費やお弁当などの手当てが支給されていることを知り、日本でも取り入れればもっと多くの若者も参加してくれるのではないかと思います。また、ボランティアに対する思いやヤングケアラーの課題、若者が少ないこと、各地で様々なボランティアをしている人がいることなどについては、日本でもドイツでも共通していることを知ることができました。他にもドイツでは若者や子供たちの意見に耳を傾けて大切にしているということが印象的でした。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたい

今所属している部活や生徒会などで発言力や積極性を高め、柔軟な考え方を活動したり、自分の周りの人に交流して知ったことをシェアしたりして意見や考えを深めていきたいと思いました。今まで部活動で高齢の方や小学生以下の子供たちにボランティアをして関わってきましたが、今回の活動で新たに大学生と関わることができました。自分の通う高校の近くに小学校や中学校があるので小中学生との関わりがまだないので関わりたいです。「小学校低学年の子たちとは遊ぶこと」、「中学年と高学年には学べる教室などを開いて知識をつけてもらうこと」など中学生には少し難しいかもしれませんが、今の自分たちにできるボランティアについて教えることや考えを深める話し合いなどを通して、ボランティアに興味をもってもらえる活動をしたいです。そして今回交流した学生のみなさんのように、大学生になってからもっと幅広く多くのボランティアができるように頑張りたいです。

(11)

■このプログラムを通して学習したこと

社会参画は難しいものではなく、小さい頃から家庭や学校などで既に行っていたことやたくさんのボランティア活動や団体があること、同世代の方たちが積極的にボランティア活動をしていることを知りました。

たくさんの講義やバーチャル訪問の中で印象強く残ったのは、一般社団法人淡路エリアマネジメントのワテラスです。ボランティア活動をしてポイントを得て年間 20 ポイント貯めると、学生マンションに継続して住めるという制度がとて素晴らしいと思いました。自分でボランティアを選んで尚且つ、楽しんで活動できていることが周囲に伝わることで周りの若者もしてみたいと思うようになっていく連鎖が今後も続いていけば、皆が社会参画をしていくのではないかと考えました。

またドイツでは、日本と違い若い人たちが主体的に活動しているなど感じました。その背景として環境や周りの大人や団体が整っていることがあると思います。私の周りで政治に関心がある人は少なく、話し合うこともないし、ボランティア活動をして手当を貰うことも少なく、社会的弱者に寄り添う団体が少ないので、日本もドイツのような社会になっていけば、若い人が主体的に活動していける世の中になるのかなと思いました。自分の思いや希望は言っても聞いて貰えない、叶わない、時間がかかるなどの理由で諦めて言わなくなっている人が多いですが、まずは自分が言って周りを巻き込めば step by step (小さな 1 歩) でも変えていけることを学びました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

まず、これからもボランティア活動は続けていこうと強く思いました。たくさんの事を知ることが出来たので、自分の周りの友達や所属している団体に共有して、みんなで社会参画が出来る世の中にしていきたいと感じました。私の所属している団体はこのコロナ禍で活動が少なくなってしまったことで会員数が減ってしまい、また講習生も減少しているので、活動が少ない中でも会員数を増やせるにはどうしたらいいかなど積極的に話し合い、解決策や対処法などを見つけ、実現していきたいと思いました。

学校生活の中でも自身を消極的から積極的に変えていき、イベントや生活をより楽しみながら周りの人を巻きこんで社会参画していきたいと思いました。そしていつか自分自身で、若い人たちがボランティア活動をするにあたってサポートする人のために団体を作ったりしたいと思います。

(12)

■このプログラムを通して学習したこと

この活動を通して日独のボランティアの考え方、コロナ後の過密を避けた実施活動の制限の状況、学業との両立や時間の拘束などについて声がきけて有意義でした。社会貢献は公共の利益、つまり人々や社会の役に立つ行いをする事です。人々や社会の役に立つ行為とは、人の命を守ることや人の安全を守ること、人の生活や教育などを守ること、国際社会や地域社会に貢献できることが挙げられます。高校生や大学生といったある程度の年齢に達していれば、高齢者や障がい者の介護支援や子どもの教育支援のボランティアにも参加できます。行事・イベントごとは地域で行われていることが多いです。それは伝統文化を継承していくものや、地域の活性化、まちづくりの一環として行われているものになります。多くは主催者が人を募って実施していきますが、そこに学生の力が加わることで幅広い年齢層の人が参加することになり、さらなる地域の盛り上がりにつながるかもしれません。地域によっては若者の減少による高齢化や、過疎などが問題となっています。生まれ故郷でのイベントごとに学生のうちから参加していくことで、伝統文化を絶やさず、衰退していくまちを救うことにもつながります。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

学生を中心として多くの人にボランティアやイベントなどの情報を知ってもらえることができれば、効果のある活動となります。国際的な観点からフェアトレードなどへの参加も社会貢献の一つです。発信することで、周知されていく可能性が高くなります。もちろん情報発信の仕方や内容には注意を払います。身近な社会貢献活動としては、募金や寄付、ベルマークなどの収集活動があります。国際的なボランティアや国際デーなどできるだけ参加して、もっと他国の人との触れ合いを大切にしたいと思います。そこで SNS 等でつながることによって、多忙な若者が少しでもボランティアに興味を持ち、参加できる機会があればと思います。以下まとめになります。

- ・ 高齢者や障がい者の介護支援や子どもの教育支援のボランティアにも参加することもできる
- ・ 地域との関わりを持ち、地域の役に立つことも社会貢献の一つ
- ・ 社会貢献の情報は SNS などを利用して情報発信することで、周知されていく可能性が高くなる

(13)

■このプログラムを通して学習したこと

参画は、決定に影響を及ぼすことが重要であるため、常に1人ひとりが考えて行動しなければならない。しかし、若者は歴史の背景からその意識が低下していることを理解した。民主主義である国は誰もが意見を述べることができ、子どもや社会的弱者なども含めて皆が平等であることを守っていかなければならない。そのため、マライケやキッズドアのように、不利な状況に置かれている人々に勇気や希望を与え、自立を目指すことができる居場所が必要であることを理解した。居場所は人の支えになり、安心・安全な場所や信頼できる人がたくさんいることで社会が開かれていくと考えた。開かれた社会では、悩みを抱える人やそうでない人も、誰もが思ったことを言ってよいというタブーのない社会ができると考えた。声を上げることでネットワークが形成され、再び安心・安全な居場所ができる。このようにして、社会が繋がっていくことが若者の社会参画であると考えた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたい

将来の夢である小学校教員になった際に、これからの社会をつくっていく子どもたちが、社会に興味や意識を持ってもらえるような指導をしたい。社会に興味を持つのは、自分の持っている権利を知ることから始まると思う。民主主義の特徴である話し合いで物事を解決することや、誰もが思ったことを発言してよいという権利などを伝えたい。また、ヤングケアラーや貧困の連鎖は当たり前ではなく、子どもの権利が奪われていることを子ども自身が早く自覚し、早期に相談などを行うことによって、将来の希望や可能性を持つことができると考えた。様々な社会に興味をもつことで、学校という狭い社会から、多様な人や居場所、助けがある広い社会に目を向けられるようになると思える。そして、社会参画のステップである学校が、失敗を許し、多くのことを経験できる安心・安全な居場所になるように、私自身が子ども達を勇気づけ、同じ目の位置で関わる教師になる必要があると感じた。

(14)

■このプログラムを通して学習したこと

私がこの事業で学んだことは、『社会参画』は身近なところでもできるということである。私はこれまで、『社会参画』とは、1人では対処できない社会の大きな問題に対して働きかけ、貢献することだと考えており、自分ではできていないと思いついてきた。しかし講義の中で、学校などの組織だけでなく、家族旅行の計画や、部屋の模様替えなど、身近なことでも『社会参画』に含まれており、自分自身が今までも社会参画ができていたということに驚いた。

私はこの事業を終えて、どんなことでも「まず真剣に考えて話し合う・議論する」という機会自体が『社会参画』だと考えるようになった。たとえ初めに話し合った理想がすべて実現されなくても、小さな一歩を踏み出すことが大切であると考えたからだ。国や文化を越えて、色とりどりの価値観に触れた経験を通して、結果よりも話し合うというプロセスを重視することの意義を学ぶことができた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたい

今回、私は身近なことも『社会参画』だと学んだうえで、小さな積み重ねが『社会参画』につながっていくと考えるようになった。今回の事業を通じて学んだことを積極的に周囲に伝え、周りの人々が社会参画に踏み入れる第一歩になるように繋いでいきたい。また、身近なことが「参画」と知ることによって、“それなら私にもできるかも”といった参画に対する前向きな意欲を啓発できると感じたため、まずは、活動報告会や広報誌などを通じて、私の周りの人々においても私のように『社会参画』に対する考え方が変わることを願いながら、できることから始めていきたい。

また、地域の子ども食堂がより活性化するよう、これからも積極的に活動を行いたい。今回の事業で携わった方々によって、多方面にわたる様々な視点から助言をいただいたこと生かし、まずは、ミーティングや話し合いの場を大切にすることからはじめ、地域と連携をとりながら活動を行っていきたい。

(15)

■このプログラムを通して学習したこと

この事業に参加する前は、社会参画とは選挙に行ったりボランティアをしたりすることだと考えていたけれど、決してそれだけではなく、家庭や学校などで行われるものの中にも私達が気軽に参加できる物があることを知り、驚きました。人に対してだけでなく環境や技術に対するアプローチをしている方々のお話を聞くことができて、新たな発見がたくさんありました。また、若者が社会参画をするということは自分たちにとってメリットがあるだけでなく、大人側にとっても青少年のニーズを反映しやすいという利点があることもわかりました。

大山さんのお話では、「自分の参加によって社会が変わっていくと思う」という質問に「はい」と答えた若者が少なかったことから、日本にはまだ依然として若者の社会参加に対する高い壁があるのだと感じ、少しでも多くの若い人に声を上げてもらうには、まだまだ解決しなければならないことが多くあると思いました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

このプログラムを通して、きちんと一つ一つの活動に向き合い、より多くの人を幸せにできるような行動をしていきたいと感じました。そのために、活動の意義や目的を再確認し、疎かになっていた振り返りや話し合いをしっかりと実施していきます。

そして、今回学んだ若者の社会参画の現状や具体的な取り組みについて自分の周りの人たちに伝え、「こんな活動がある」ということを改めて認識してもらい、少しでも社会参画に対する障壁を取り除いていけるよう努力したいです。

マイノリティーであることへの引け目を感じるのではなく、一生懸命自分たちの思いを形にしたり、行動に移したりして、若者の社会参画というものが世に広まるようなきっかけづくりができるようにより多くの人や機関と交流していきたいです。

(16)

■このプログラムを通して学習したこと

気候変動が貧困問題につながる部分があると知り、どれか1つでも、一部分でも問題を解決することができれば、その他の問題も少しずつ解決できる気がしました。また、日本でのボランティアの状況やドイツとの違い、政治に対する考え方など、社会参画についての知識を多く得ることができました。しかし、テーマに沿ったことだけではなく、私が今後生活するにあたって大切なものに気づくことができました。それは、互いの意見やさまざまな考えを尊重することがとても重要であるということです。自分の意見ばかりを通すようでは良いコミュニケーションは取れません。今回の交流の中で、ドイツの学生とのディスカッションをする機会が多くありました。ドイツの方と話す機会はとても貴重であり、さまざまな考えがあることに気付かされました。これから人と何かをするときは「聴く」ということを大切に、行動していくべきだと学びました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

私は将来、世界中に住む全員が自分の生まれた国や生活に誇りをもち、自分自身に自信を持って生きられる平和な世界を創りたいと思っています。今回の交流を通して、全員が自分らしく生きるためには、一人一人が変わる必要がなく、社会が変わっていかねばならないと学びました。社会を変えていくために、まずは現状を知る必要があります。今世界で何が起きているのかをより深く知り、問題を解決するために何ができるのか多くの人と力を合わせて考え、少しずつみんなが暮らしやすい社会に変えていきたいです。

これからも、日本だけでなく世界に目を向け、他の国や地域ではどのような活動が行われ、どのような課題があり、逆にその活動によって社会にどのように貢献できているのかなどを学びたいです。そして、日本や世界をより良くするために、アイデアを共有してそれぞれ国に活かせる部分を探していきたいです。

(17)

■このプログラムを通して学習したこと

今回この事業に参加して、ドイツでは「参画」自体は家庭の中でも行われていることや、子どもの頃から小さなことでも意見を言うこと、決定に携わることが大切であるということを講義から学びました。一方で、日本は歴史的背景から参画に対してハードルが高くなっているのではないかと感じ、参画自体は小さいことから始められるということを私たちが伝えていく必要があると思いました。また、やりたいことを挑戦できる環境が大切であると学び、そのための支援は教育や福祉など様々な場面でも求められる重要なことだと感じました。失敗から学ぶこともたくさんある為、失敗を恐れず挑戦することに意味があるということを身近な人に伝えていきたいと思いました。このような意見を言える環境、挑戦できる環境が参画につながると考えるため、私たちが声を上げることで少しずつでもその環境を整えることにつながると感じました。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

何事も他人任せにするのではなく、小さいことからできることを行い、自分から声を上げられる存在になりたいです。何かを始めることだけではなく、「もっとこういう視点から考えたほうがいい」など気になった事を周りに伝えていきたいです。また、バーチャル訪問した際に仲間がいることや自分を認めてもらえることが重要であると再認識したため、身近な人たちと一緒に活動する、活動に繋げるなどの関わりを作りたいです。さらに、研修会や企画の打ち合わせ等に参加した際に自分の無知を痛感した為、まず自分がたくさんを知る必要があると思いました。そのためボランティアに行くだけではなく研修会等に参加して知識を得ることも必要であると実感しました。成長し続けること、学び続けることを大切にしていきたいです。最後に、ボランティアは参画の一つとして考え、私にとって大切なボランティアの魅力を多くの人に伝えていきたいです。

(18)

■このプログラムを通して学習したこと

私はこの事業を通じて恥ずかしながら自分自身の無知を自覚し、人や社会のためになる活動や心構えが足りていなかったということを痛感した。日本とドイツ両方の講義や、参加学生との意見交換などを通じて、世の中では、様々な視点から若者の社会参画のために、多くの素晴らしい取り組みが行われているのだということがわかった。そして、そういった取り組みに携わっている方は一人ひとり社会に対して様々な問題意識をもって、解決のために何ができるか考え、周りと共有し合うなどプロセスを踏んで取り組みを実行しており、社会参画のしやすい社会を作るためには一人ひとりの心がけが大事な一歩なのだと思ふことができた。また、特に印象に残った U25 についての講義では、悩みを抱えている人への向き合い方、また向き合い方を考え、工夫し、真剣に向き合うことの大切さを学ぶことができた。

■このプログラムを通して学習したことをどのように活かすか、今後どんなことを行いたいのか

私は現在学生ボランティアコーディネーターとしてボランティア活動の啓発活動や学生のボランティア活動の底上げに対する取り組みなどに力を入れている。この事業を経て、社会問題に対する自分自身の意識が変化したと感じており、ここで学んだことを意識することを大切にし、自分たちの活動にも生かしていきたいと思う。また、私は悩みを抱えている人の助けになるということを生の中で大切にしていきたいと考えているので、今回の U25 についての講義で学んだことを自分の人生の中で生かしたいと思った。機会があったら現在所属している団体のメンバーにも伝えることはもちろんのこと、将来つきたいと考えている保育の現場でも共有し、普段から「社会参画」について考えることのできる環境をつくっていききたい。

全体の総括

全体の総括（国際・企画課）

（１）企画について

本事業は例年、お互いの国に２週間程度滞在し、州政府関係機関、ボランティア団体などの訪問を通して、若者の社会参画・ボランティアをテーマに実施している。本年度は、新型コロナウイルスの感染症の影響により令和３年度に引き続き、WEB 会議システムを使用したオンライン形式で開催した。

実地交流のプログラムを踏襲し「講義」「バーチャル訪問」「ディスカッション」を実施し、自国を含む両国の制度や取り組みなど学んだ後に日独参加者が意見交換をできるプログラム構成とした。昨年度、参加者からの「日独団員の交流する時間が短い」との声を受け、全日程日独合同で実施し、毎プログラム終了後に日独団員が自由に交流できる機会を設け、より濃密な交流となるようにプログラムを構成した。

講師及び訪問先については、各参加者が所属団体に活動している内容も考慮して選定した。「講義」においては、日本の社会参画の歴史的要素から現在に至るまでの背景から若者の社会参画について学び、また、「バーチャル訪問」においては、より実地交流に近い学びを提供できるよう、団体の取組について学ぶだけでなく、実際に訪問先で活動する学生ボランティアとの意見交換の場を設けるなどの工夫をした。

（２）成果

今回、高校生の参加者が例年より多く、成年年齢の引き下げによって、より若い世代が社会参画について考え、興味を持っていると推測される。

日本団の成果としては、事業全体の満足度は 100%であり、全参加者からプラスの評価が得られた。参加者からは、「社会参画についての自身の考える幅が広がった」や「今回、知り合ったドイツ団、日本団の方々とこれからも交流を続けていきたいと思った」という声が聞かれた。

ドイツ側参加者からも「自らのボランティア活動における不安や悩みが少しずつ取り除かれていったこともあり、今回の交流は特に貴重だった」「ドイツ、日本には志を持って活動している人がたくさんいる」等、肯定的な感想がみられたことから、国際交流事業として高い成果が得られたと言える。

（３）課題

今回は日独合同開催ということもあり、連日続くプログラム構成となったため、参加者からは「1 日の時間を少し短時間にした方がよい」との声もあった。参加者の負担を減らし、集中してプログラムに取り組めるよう、オンライン開催の場合は、今後、1 日あたりのプログラムの時間を短縮するなどの検討をする必要がある。

また「非常に充実した出会いや学びがあった一方、やはり対面で訪れ、交流したい気持ちがあった」という意見もあり、実地交流に対するニーズの高さが伺えた。

最後に、今回の企画・運営に際し、多くの方に携わっていただいたことで、日本団、ドイツ団ともに有意義な研修を実施することができた。プログラムに協力してくださった全ての方に感謝を申し上げる。



令和4（2022）年度 文部科学省委託事業
日独学生青年リーダー交流 事業報告書

令和5年3月発行

編集発行



独立行政法人 国立青少年教育振興機構 国際・企画課

<https://www.niye.go.jp>

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

TEL 03-6407-7756

本報告書は、文部科学省の青少年国際交流推進事業委託事業として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和4年（2022）年度「日独学生青年リーダー交流事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。